

# 私の「三都物語」

新井 宏

「アンダルシア」という地名には、母の胎内で聞いたような懐かしい響きがある。

スペインにもアンダルシアにも、まったく接点のなかった母が、胎児に語りかけることなど有り得ないのに、なぜかこの拘念は強まるばかりで、いつの間にか、アンダルシアの他に、ヴェネツィアやイスタンブールが加わり、エキゾチックな憧れの「三都」ができあがった。いずれの都も東西文化の融合地という共通点を持つ。

だから、私はアンダルシア↓ヴェネツィア↓イスタンブールと逆のコースをたどって、シルクロードの歴史に関心を持ち、それから、日本の白鳳文化・飛鳥文化や古墳文化の世界に入ったのである。

それゆえに、夫婦の海外旅行は、ヨーロッパ中心部はそこそこにして、ポルトガル、スペイン、エジプト、シチリア、マルタ、南イタリア、ヴェネツィア、オーストリア、チエコ、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、

ルーマニア、トルコなど、ヨーロッパとビザンチン・イスラムの接点ばかりを回っている。

アンダルシアとイスタンブールは駆け足ながら二回訪れたが、ヴェネツィアはなかなか機会がなく、念願が叶ったのはやっと三年前である。だから、私の「三都物語」は、そのヴェネツィアから始める。

## 一、ヴェネツィア

もう三十年以上も前になるが、会社創立五十周年記念に、塩野七生の『海の都の物語』を下敷きとして書いた論文が最優秀賞となり金杯をもらった。

人口わずか十万人の通商都市国家ヴェネツィア共和国が地中海に覇を唱え続けた千年の歴史……。それは決して強大国が強大国として存在し続けた歴史ではない。むしろ弱小国としてのヴェネツィアが強大国のトルコやフランス、ハプスブルグ家に対して、弱小国に徹しきった

ことにより守り抜いた地位である。

その間、ヴェネチア共和国は徹底して独裁を排除する仕組みを維持し続けていた。

しかし独裁を排除して、元首ドージェの力を削いでしまつては元も子もない。そのため元首ドージェの任期は、他の役職がほとんど一年以内なのに、特別に終身制であつた。終身制の弊害を、良く承知してはいたが、元首に力を集中しなければ、国の発展などありえない。

その微妙なバランスを維持するため、ヴェネツィアは、元首ドージェの職務を監視する組織を強化し、ドージェが死亡した後には、生前の職務評価を行い、不正や財産も調べた。もちろんドージェによる後継者の指名は禁止され、新たな元首ドージェの選出には複雑怪奇な制度を採つた。

とにかく、奇想天外な制度なのである。しかし、要約して言えば、籤と推挙の繰り返しを通じて、「四十一人」を選出して、そのメンバーの互選によって元首ドージェを選ぶ間接制選挙なのである。

選出のプロセスはこんな風である。

まず三十人の委員が「籤」により千五百人弱の大評議会議員貴族のことの中から選ばれる。籤による選出であるからどんな人物が紛れ込むか判らないが心配いらない。それは、この三十人をさらに籤で九人に絞り、この九人が四十人を選び、この四十人も籤で十二人に減らさ

れ、更にその十二人が二十五人の委員を選び、その二十五人も籤で九人となり、九人が四十五人を定め、四十五人は十一人に絞られ、その十一人が、実際にドージェを決める四十一人を選任するのである。

何を言っているのかさっぱり判らない制度であるが、この籤と推薦の繰り返しのおかげで、最終的に選ばれる者が「ひとかどの人物」で構成されることには納得が行くであろう。

この複雑怪奇で巧妙な制度によって、有力家門といえどもドージェの位を自由にすることは難しく、ましてや、ポピュリズムに乗って、強気で短慮な人物を選んで通商国家としての柔軟性を失い、国を危うくするようなことも防げた。

政治のように、利害をバランスよく調整することが最大の眼目である場合、反対派が正義を掲げポピュリズムに乗って、一気に台頭することは、むしろ危険である。幼稚な正義感だけでは、複雑に絡み合った利害の調整など手に負えないことは、今の民主党が如実に示している。だから、直接選挙制は民主政治の理想とされながら、衆愚政治に陥る危険性と表裏の関係にある。思慮ある国民なら、ヴェネツィアほどの間接制とまでは行かなくとも、ポピュリズムに振り回されない制度を研究してみなければなるまい。

それを具体的に示しているのがヴェネツィアの歴史な

ので、『海の都の物語』をはじめとして関連の歴史書をしばしば乱読していた。

だから、わずか巾が三キロメートル、長さにしても七キロメートルしかないこの小さな島の地図や歴史がすっかり頭に入ってしまった。いや、少なくとも主観的にはそんな気分になっていた。そのためか、憧れのヴェネツィアの路地に迷い込んでも、それほどの感興を催さない。

それでも、島々を結ぶ連絡船に乗って、潟内に敷かれた迷路のような水路を行き来すると、海の要塞ヴェネツィアを十分に体得できる。潟の地理を知らない外国勢が浅瀬に乗り上げて、自滅してしまっただのも無理がない。そんなことを思いながら、潟の外郭を形成しているリド島に渡って昼からワインを飲み悦びに入った。

ぜひ見たいと思っていたのが、サン・マルコ寺院の屋根の上にある青銅製の四頭の馬である。どこを旅行しても、金属製の遺物を見て回るのが趣味としているが、この青銅馬は逸品中の逸品で、類例としては始皇帝の銅車馬坑から出た精細なつくりの四頭の馬しかない。しかも始皇帝の馬車は実物の二分の一なのにサン・マルコの馬は等身大で、体積・重量では一桁も大きい。

初めはローマのネロ皇帝の凱旋門上を飾っていたらしいが、遷都と共にイスタンブールの競技場に移されていたもので、一二〇四年の第四回十字軍でヴェネツィアが戦利品として持ち帰ったものである。

さて、その第四回十字軍である。

ローマ法王インノケンティウス三世の呼びかけで始まった第四回十字軍は、もともとはシリアやパレスチナを支配するアイユーブ朝の本拠地カイロを攻撃する予定で、海路輸送をヴェネツィアに依頼していた。ところが、十字軍参加者は一人人ほどで予定の半数にも満たず、約束の費用、すなわちフランス国王の年収の二倍にも相当する八万五千マルクを、とてもヴェネツィアに支払える状況ではなかった。

そこで、ヴェネツィア共和国の元首ドージェのエンリコ・ダンドロは大芝居を打つ。自国の貿易路の確保と拡大のため、ヴェネツィアも十字軍に参加して、キリスト教国の東ローマ帝国を攻略すると言う奇策を提示したのである。この時、東ローマ帝国は内紛状態にあり、十字軍の力を利用すれば、ギリシャ正教の東ローマ教会を抑え、ローマ教会と統合させて、イスラムに対抗できるとの建前であった。

たとえ建前がそうであったとしても、れつきとしたキリスト教国の東ローマ帝国を襲うという背教的な行為はキリスト教界から一斉に非難された。しかし、ヴェネツィアは現実的な利益を優先し悲しむることがなかった。

その結果、イスタンブール（本来はコンスタンティノープルと記すべき場合もあるが以下イスタンブールで通す）は、ヴェネツィアの手海側からの果敢な攻撃と、帝国

内の内紛によって、むしろ優勢な兵力を抱えながら、皇帝が逃げだしてしまい、新皇帝を選んで和解してしまう。これが第一次攻城戦の結果であった。

自らも戦闘に参加した老齢のダンドロの目標は達成されたかに見えた。しかし、東ローマ側の教会、すなわちギリシャ教会がローマ教会にすんなりと統合されるはずがないし、新皇帝も約束の契約金を支払えない。その上、反十字軍側の勢力が強くなり、新皇帝を殺害するに及んで、第二次攻城戦が始まった。

経過は第一次の時と似ていて、金角湾側の城壁の一部を破られたイスタンブール側は、今度も皇帝や大司教が逃げ出してしまった。そのため、本格的な市街戦をするつもりで城内に乱入した十字軍は抵抗らしい抵抗も受けずに、城内を簡単に制圧した。そして十字軍の慣習によって、三日間の略奪が許された。

それはキリスト教徒に対しても、対イスラム十字軍の時と何らかわるところのない略奪・暴行・強姦・殺戮であった。異なっていたのは、イスタンブールが比喩するもののないほどの富を持っていたことである。

かくして、東ローマ帝国はいったん滅び、フランス人による「ラテン帝国」が成立する。

勝利したヴェネツィアは、賢くもラテン帝国の経営には深く関与せず、通商路の確保と拡大で十分すぎる成果を得て満足して、通商国家としての基礎を固めた。

しかし、ラテン帝国は諸侯の寄合い所帯であり、周辺国との関係もうまく維持できず、白壊に向う。それでも何とか半世紀ほど政権を維持していたが、その海軍が動いている留守を東ローマ亡命政権に襲われて、一二六一年には滅亡させられてしまう。

もしかしたら、十字軍が、純粹に宗教心に基づく行為だったと思っているのは、現代人の一部だけかも知れない。十字軍の実態を知れば、この悪名高い第四回十字軍のように、一時的な勝利を得ても、結局はイスラムと対峙する地域のキリスト教国家の力を大きく削いでしまう結果をもたらしている。本当に勝利したのはヴェネツィアだけだった。

東ローマ帝国を回復した亡命政権ではあるが、もともと弱体であった。昔日の面影はなく、ますます弱体化し、帝国とは名ばかりの小国に転落してしまう。

かくして、一四五三年にはオスマン帝国メフメト二世のイスタンブール攻撃によって東ローマ帝国は千百年の歴史を閉じてしまい、その結果として、東ヨーロッパの大部分がイスラム支配下に入ってしまうのである。

朝日うけ 豪華客船 瀕に入る

近よるなかれ 浅瀬の要塞

## 一、アンダルシア

アンダルシアの場合も、もう三十年以上前になるが、イベリア半島最南端のアルヘシラスに、ステンレス鋼の工場を訪れたことがある。その頃、海外に出ることなどあまりなかったのに、偶然とは言え、アンダルシアをこの眼で実見できたのである。胎内の懐かしい響きがよみがえってきた。

アンダルシアには、コルドバ、セビリーヤ、カデイス、アルヘシラス、マラガ、グラナダなどの著名な観光地があるが、出張途中のこととて、とにかくアルヘシラスからマラガ、グラナダを二日間で走り抜けた。

しかし、響きの柔らかいアンダルシアという語感とは異なり、万年雪を頂くシエラ・ネバダ山脈の麓に広がるアンダルシアは、強い日差し、鉄分を含んだ赤土の台地、乾燥地に育つオリーブの木、そして道行く人の貧しさに彩られ、荒涼としか云いようのないものであった。

そもそも、アンダルシアの語源はバンダルの発音由来するといふ。ゲルマン民族大移動の先陣を切って、イベリア半島からアフリカまで駆け抜けたバンダル族はバールリアン(野蛮人)の代名詞となっているように、麗しきアンダルシアのイメージを損ねる。

しかもナスル朝グラナダ王国の都グラナダのアルハンブラ宮殿には、入場時間に遅れてしまふ失態もあって、

代わりにグラナダで最も古いアルバイシン地区を見て回る始末であった。

しかし、それがいつしか、忘れがたい光景と化して、妻と共に十年前に再訪する。今度はツアーに参加したので、アンダルシアだけでも七日間の比較的ゆつたりした日程であった。

セビリアではコリア・デル・リオという田舎町まで足を伸ばし、支倉常長の銅像を見て、コリアの名称からの連想として、文禄慶長の役で、奴隸として売られた朝鮮人に想いを寄せた。町にはヤポン姓を名乗る人たちが八百人もいると言ひ、最近になって、DNA鑑定をして日本人の後裔であるか否かを調べるプロジェクトが進んでいるという。

もちろん、今度こそそのアルハンブラ宮殿であった。しかし、これも予習が過ぎていて、新しい感動は少ない。それでも水路を引き噴水を配した小作りで瀟洒な宮殿は、日本人の感覚には良く合う。砂漠の民が築いた楽園を想う。

十三世紀に入つてレコンキスタ(国土回復運動)が進む中で、グラナダを都とするナスル朝だけが最後のイスラム王朝として生き残っていた。しかし、カステイリヤ女王イサベル一世とアラゴン王フェルナンド二世の結婚により、実質的に両国が統合されると、もはや運命は決まってしまう。

ナスル朝は、一四九二年にはグラナダを明け渡し、スペイン両王の王国によるイベリア半島の統一が達成される。この年、イサベル女王の援助を得たコロンブスが新大陸を発見する。

アルハンブラ宮殿にとって幸いだったのは、その強固な城壁が攻撃に十年間も持ちこたえたことで、降伏に際してカトリック側から「寺院や施設を存続させて宗教の自由を認める」という譲歩を引出したことである。その結果の無血開城により、現在でも多くの建築や文化が残り、イスラム王朝最期の栄華を偲べる。この地を気に入ったイサベル女王は、自身の遺言により、アルハンブラ宮殿に眠る。

この両王のもとで始まったスペイン王国は、やがて娘のフアナ(後に発狂してフアナ狂女王と呼ばれる)がハップスブルグ家のフィリップと結婚して、後のカール五世(カルロス一世)を生み、大航海時代の大帝国内に発展する。

もつとも、アルハンブラ宮殿は「リップ・バン・ウインクル」の著書もあるアメリカ公使館の書記官アービンが『アルハンブラ物語』を書いた一八三三年には、かなり荒れ果てていたという。幻想的な物語を織りまぜて、詩情ゆたかに綴られたこの物語によって、アルハンブラ宮殿は世界に知られ、荒廃から救われたとも云われている。

そこには小泉八雲の「怪談」のような話も登場するが、あるいは八雲がアーピングから影響を受けていたのかもしれない。

そんなことなら誰でも想像しそうなことであるが、小泉八雲の評伝を見ても出てこない。そうなると少し拘る。そして、小泉八雲の「幽霊」の奥註に「怪談其他数多の同氏が著書はラシントン、アーピングの如き流暢なる英文を以てよく我國の人情風俗を書き表はしたるものにして泰西の読書社会は雙手を舉げて氏の著作を歓迎し氏を以て世界第一流の文學家となすに至れり」とあるのを知った。

『アルハンブラ物語』と同じようにフランシスコ・タルレガが一八九三年に作曲した『アルハンブラの思い出』というギター曲もアルハンブラの詩情を高めたのは疑いない。

「禁じられた遊び」と共に有名なこのギター曲を、小学校五年生になる孫がもう奏でる。そう言えば、夫婦でアンダルシアに遊んだ頃、妻はまだ見ぬ孫を勝手に女の子だと決めて、可愛い女兒服を買っていたのを思い出す。

調べてみると『アルハンブラの思い出』は、長らくラジオのバックグラウンドミュージックとして用いられていたと言う。あるいは、それを胎内で聞いたと美しく誤解したのかも知れない。

落日を アンダルシアの 地平線  
支えきれずに 赤く燃ゆ

## 二、 イスタンブール

今、中国を抜いて世界で最も経済成長率の高いトルコを十五日間のツアーで訪れたのは五年前である。その三年前にもブルガリア・ルーマニアの十五日ツアーの行きと帰りにイスタンブールに立ち寄っているので、本の知識と土地勘や方向感はある程度一致している。

メフメット二世が金角湾の鉄鎖による封鎖を突破するため、「船山を登り」侵入した経路なども、地形を見てガラタ塔の背後だと納得する。

歴史的なことは言わなくても、ヨーロッパとアジアの境はイスタンブールのボスフォラス海峡である。トルコは経済的にはEU加盟国の資格を十分に満たす優等生でありながら、ヨーロッパ側はトルコを排除したがっている。イスラムに対する違和感がそうさせているのである。歴史的には、アジアへの恐怖感も引きずっているのである。

コンスタンティヌス帝が三三〇年にこの都市を新しいローマの首都と定めてから、一四五三年にオスマントルコによって滅ぼされるまで、東ローマ帝国は形式的にはローマ帝国の継承者であり続けた。三九五年に東西ロー

マに分裂して、いったん西ローマ帝国が成立しても四七六年に滅びてしまったので、唯一のローマ帝国は、結局、ローマの地とは無関係にイスタンブールに都を置いていたのである。

東ローマ帝国の文化を一般的にはビザンチン文化という。

ラテン文化に加えギリシャ文化を色濃く継承し、蛮族に蹂躪された西ヨーロッパに較べたら遥かに洗練された文化を花開かせていた。地域的には、アンダルシア、シチリア、イタリヤ、ギリシャ、ブルガリア、ルーマニア、ロシアの文化の基層をなし、その後、イスラム文化を重畳させて、西ヨーロッパ文化を遥かに凌駕する文化の遺産を伝え、後には西ヨーロッパに多大な影響を与えている。ルネッサンスもその流れの一環である。

ヨーロッパの周辺地域を歩くと、ビザンチン文化やイスラム文化を色濃く残しているところばかりである。イスタンブールはもとより、ヴェネツィアもアンダルシアもその重要な役割を担った地であった。

東ローマ帝国の最盛期は皇帝ユスティニアヌスの六世紀中頃である。四十一・五メートルの高さを誇る聖堂アヤ・ソフィヤや地下宮殿ともいうべき巨大な地下貯水も彼の手によって作られ、帝国の版図もこの頃に最大となった。

ユスティニアヌス帝が強大な権力を握ったのは、「二

カの乱」を皇后テオドラの叱咤激励によって鎮圧したからである。戦車レースを巡る小暴動の裁定不満を契機に、皇帝罷免を要求する大暴動が発生した。なにやら現代のサッカー暴動に似るが、それが権力闘争と結びつくと、大きなエネルギーとなる。

皇帝は帝都から脱出することを考えた。しかし、ここで皇后テオドラは「帝衣は最高の死装束である」といつて徹底抗戦を主張して、暴徒を三万人も殺害して鎮圧した。

当然のことであるが、テオドラは女帝と言われるほどの権力を持つ。もともとは、淫らなショーへ出演し娼婦まがいのことをして生計を立てていたというが、ユステイニアヌスが一目惚れして、周囲の反対を押し切って結婚してしまう。

なぜか権力者は娼婦まがいの女を皇后にする。ロシアの皇帝ピョートル一世の皇后となったエカチエリーナも、ルイ十五世の公妾デュ・バリイ夫人も娼婦の出である。ナポレオンの皇后ジョセフィーヌさえ、いわば高級娼婦であった。

さて、ユステイニアヌスが一目惚れして、周囲の大反対を押し切り正式な皇后として迎えたテオドラはさぞかし美人であつたらう。そのモザイク画が残っているのである。

侍女たちに囲まれて中央にすくつと立つテオドラは長

身に細面、眼が大きく、知的な印象はあるが、私の基準では美人の範疇には入らない。むしろ、付き従う侍女の中に美人が目立つ。

ところで、このモザイク画がイスタンブールにあると思つたら間違である。実は、ヴェネツィアのやや南、アドリア海に面したラベンナの聖堂サン・ピタールの壁画なのである。

ラベンナはかつて西ローマ帝国の都であつたが、この頃、東ローマ帝国の支配下に復していた。しかも、この聖堂がつくられたのが、ユステイニアヌス帝の在位中であるから、皇后テオドラのモザイク画が残っていたとしても何の不思議もない。それにもかかわらず、驚きを感じるのは、私の勉強不足に過ぎないとしても、北イタリアまでビザンチン文化が支配していたことの意外性によるのであろう。サン・ピタール聖堂はビザンチン建築の代表作なのだそうである。

さて、ここで、ちよつとイスタンブールの地形を眺めてみよう。

イスタンブールは南東側と北側をマルマラ海と金角湾に囲まれ、南西側だけに陸地が続く。そのため、地上側にだけ頑強な城壁を築けば難攻不落の要塞となる。事実、帝国の初期にテオドシウス帝が築いた大城壁は良く機能し、第四回十字軍の時こそ、城内の内紛で落城したものの、それまで外敵をことごとく除けてきた。



しかし、ついに最後の時がやってくる。日の出の勢いのオスマントルコ・メフメット二世がイスタンブールを彼の都として望んだのである。

その頃、東ローマ帝国とは名ばかりで、実質的に小国に転落していたイスタンブール側はキリスト教国からの外国人を加えても七千人の兵力にすぎなかった。それに對して、メフメット二世は十万余を投入し、一四五三年の四月初めから攻城を開始した。

しかし海という天然防壁と強固な大城壁に守られたイスタンブールは一ヶ月以上たつても、なかなか落ちない。結局は、メフメット二世が準備した秘密兵器ウルバン砲が大城壁に穴を開けたのを契機として、城内は略奪と殺戮の場となり落城した。いつもの風景である。

ところが、イスタンブールを自己の都として望んだメフメット二世が正式に入城すると秩序が直ちに回復される。イスラム法にしたがつて、市民達は身柄を保証され、ここにオスマントルコの都の大規模な建設が始まり、イスタンブールは再び、東西交易の大センターとなるのである。

余談になるが、ウルバン砲（メフメット二世砲とも言う）というのは、ハンガリー人のウルバンが設計したものであるが、その同型が英国のウルウィッチ博物館に残っている。長さ五メートル、重さ十九トン、口径六十四センチの鑄銅砲で、五百キログラムの石弾を一マイル

も飛ばせたという。戦艦大和の主砲口径が四十四センチであったことと比較してみると如何に巨砲であったかわかる。メフメット二世はこの砲を大城壁の正門ロマンヌ門の前に備え付け、非効率的ながら根気よく砲撃して、遂に穴を開けるのに成功したのである。

この砲撃を契機として、ヨーロッパで大砲の時代が始まる。

古都守る 金角湾の 鉄鎖避け

オスマン艦隊 ガラタの丘ゆく